

SONRISA

# そんりさ

vol.183



ビオダンスの創始者ロランド・トーロ

いのちの踊り

ビオダンス

- |    |  |       |            |
|----|--|-------|------------|
| 02 | いのちの踊り   | ビオダンス | …内田 佳子     |
| 04 | メキシコ軍に暴行された先住民女性の正義と癒し…アンヘル・マリスカル<br>エレナ・セパダ/イサベル・マテオス |       |            |
| 08 | 2017年人口センサスでみるペルー社会(1)                                 |       | …村井 友子     |
| 12 | 回想のラテンアメリカ アルゼンチン2                                     |       | …唐澤 秀子     |
| 14 | ペルー音楽 ラテンアメリカにおけるフェミニズムを<br>めぐる歌の旅(1)                  |       | …水口 良樹     |
| 16 | ラ米百景 偶感:キューバ危機60周年                                     |       | ……伊高 浩昭    |
| 17 | メキシコ料理 エビのトマトソースがけ                                     |       | …ミゲル・アクーニャ |
| 18 | ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み                                    |       | ……小林 致広    |

2023年1月22日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

# いのちの踊り ビオダンサ

内田 佳子(ビオダンサ・ファシリテーター)

## はじめに

みなさまこんにちは。RECOMの立ち上げ期を含む数年間、ボランティアとして参加しておりました内田佳子と申します。この度、昔のご縁が繋がりなおし、私がその後取り組んできた、チリ発祥のBiodanza(ビオダンサ)というダンス・ワークについてご紹介する機会を頂戴しました。どうぞよろしくをお願いします。

本稿を読んで下さる皆様にとって、初めて聞く名前かもしれませんが、Biodanzaの「Bio」はいのちを意味する接頭辞で、ビオダンサは和訳するなら「いのちのダンス」です。創始者のロランド・トーロ・アラネダ(Rolando Toro Araneda)は、教師、人類学者、心理学者として、また生涯を通じて詩人として生きる中からビオダンサを着想し、その試みはやがて国境を越え、海を渡り、たくさんの地域へと広がっていきました。

ダンスというと、柔軟性やリズム感、振り付けの再現力など、身体能力や適性が問われるものと思われがちですが、トーロは、ダンスはすべての人のものであるとし、私たち人間が持って生まれた様々な潜在力とつながりなおしていく「場」をダンスの中に掘り起こしました。

私たちが今生きている世の中は、戦争をはじめ、ありとあらゆる暴力が跋扈し、住まいである地球自体の今後危ぶまれています。そんな時に「踊ってる場合じゃない!」と思われるかもしれませんが、だからこそそのダンスであるということを、ビオダンサが生まれた時代や背景も交えて、少しでもお伝えできればと思います。

## ロランド・トーロとビオダンサの起源

トーロは1924年、チリのコンセプションに生まれ、親兄弟や親戚の多くが教師という環境もあってか、初等教育の教師として社会人の第一歩を踏み出します。トーロは、教師の根本的な役割は、何かを強制することではなく、子どもたちが内に秘めた才



東海大学マルチ・カルチャーキャンプでのワークショップ

や繊細さ、知性、霊性を豊かに育ていけるよう奨励し、刺激を与えることだと確信していました。また、知育に偏った教育システムの下では、子どもたちの創造力や活力はむしろ失われていくとの危機感を持ち、生徒たちが野外で自然に触れ、芸術を通じて表現する場を大切にしました。そうした問題意識や、チリの子どもたちを巡る経済的な状況についての情報発信と社会啓発の場として、1954年に初の「子どもフェスティバル」を開催。6千人の子どもたちが参加し、子どもたち自身の手による絵画や陶芸の展示、音楽の演奏などが行われました。

1960年代になると、トーロの人間へのあくなき探求心は、彼を心理学や人類学の研究と実践の場へと押し出し、人間性の回復のひとつの方法として、音楽と身体の動きによるグループの集いという形で、医療機関や大学などで試みられるようになります。現在のビオダンサの前身です。当時は「サイコダンサ」として紹介され、ダンスを通じた自由で原初的、かつ真摯な表現の発露は注目と関心の的となり、プレゼンの様子は現地の新聞でも度々取り上げられました。

1973年にピノチェトが軍事クーデターでアジェンデ政権を倒し独裁体制に入ると、トーロは大学での職を失い、翌年にはアルゼンチンの大学から招聘を受けてチリを去ります。トーロにとって、心と身体は分かちがたい、同じひとつの現実の二つの呼び

名であり、当初のサイロダンスという名前がしっくりこなくなり、やがてフランスの哲学者ロジェ・ガロディの「いのちを踊る」という概念と出会って、1976年には「ビオダンス」へと名前を変更します。その後、ブラジルで本格的にビオダンスの活動を展開。さらにはイタリアに移住して欧州での活動を開始し、ビオダンスは、中南米同様、欧州においても多くの国で親しまれていきます。



国際ビオダンスのHPより

## トーロがビオダンスに託した思いとその背景

トーロは、当初は主に医療の現場で、音楽と身体の動きが人間に与える影響を発見しました。やがて、病を患っているかどうかにかかわらず、そもそも人が生をまっとうする上で不可欠で根源的な要素を、仲間たちとの対話の中で見出していきます。

幸せに生きる上で何を求めるか？トーロの問いかけへの周りの人々の答えは、多種多様であると同時に、その中からは、健康、生きる喜び、自然とのふれあい、表現や創造にかかわる活動、家族・パートナー・仲間とのつながり等々、多くの人に共通するものが見えてきたといえます。そして、そうしたいのちの奥底から湧きあがる求めや喜びと切り離された経済中心の競争社会が、現前の暴力、破壊、搾取を産み出しているとトーロは考えたのです。

トーロは、第二次世界大戦、戦後の東西冷戦とそのラテンアメリカへの飛び火の真っ只中で青年期を生き、人間が信じがたいような残虐な行為に及ぶさまに憤り、嘆きます。一方で、家に帰れば子どもたちが見せてくれる豊かな人間性の萌芽に感動し、どうしたら人間の、情愛に根差した豊かな力を育み、開花させることができるのか、試行錯誤の末に、人と人が出会い、踊る場としてのビオダンスが生まれていったのです。

トーロは、ビオダンスは絶望と、愛へのノスタルジーから生まれた、と言います。喜びをもたらすダンスが絶望の傍らで生まれたということは、一見逆説的にも見えますが、限界状態においてこそ、本当に大切なことが見えてくるのは世の常なのかもしれません。そのことについて、少しスペースを頂戴して、私自身の体験から紐解いてみたいと思います。

## 一人称の体験と人間性の回復

私が初めてビオダンスに出会ったのは、ブラジルのサンパウロに留学していた頃のことです。サンパウロ・カトリック大学の社会福祉学部で社会政策やジェンダーについて学ぶ中で、女性を対象とするソーシャル・ワークの現場を探していたところ、教授からある活動を紹介されました。路上や簡易宿泊所に暮らす低所得者層のコマーシャル・セックス・ワーカーの女性たちを対象とする活動でした。

毎週月曜日の午後、サンパウロ市の中央駅近くの保健所で、医師、心理療法士、社会福祉士の3人組の女性たち主催するその集会では、性病対策や避妊に関する保健教育にはじまり、州政府への意見書の作成の支援や、文化的なプログラムが提供されていて、その一環としてビオダンスが行われていました。

参加し始めてしばらく経ったある日、口頭でのシェアリングの場でのこと。ずっと参加してきた一人の女性が言いました。「路上で暴力に遭い、悲しくて、自分など取るに足らない存在なのだと気持ちが沈んだとき、不意に、ここでリズムに乗って颯爽と歩いている自分の姿が浮かんで来て、ああ、私は胸を張って歩いて行っていいのだ！と思った。」そう語る彼女の目が、強く光っていたのを今でもはっきりと覚えています。

最初は、楽しく踊ったり、感動しながらも、どこか支援者的な立ち位置で参加していた私が、踊る場のすごさを自分ごととして受け取りなおしたのは、2年の滞在期間の終盤でした。そもそも、ブラジルの都市の貧困問題に関心を持ち、現地に飛び込んだ私の中に、世界をよくしたい、誰かの役に立ちたい



タイ・バンコクでの週末ワークショップ

という、ちょっと独りよがりな救世主コプレックス的な何かがあったことは否めません。そして、なりふりかまわず飛びこんで行った地球の反対側で浮かびあがってきたのは、真摯に向き合うべき存在としての自分自身でした。

やがて人生の大きな危機が訪れ、やぶれかぶれになっていた時、自然の中で踊るバイオダンスの合宿に誘われ、参加しました。音楽に乗り、歩き、弾み、漂い、出会い、また歩く。濃密な三日間の最終日、コテージの外に出て、太陽の下、芝生の上に裸足で立ち、みんなで風に吹かれるように静かに動き出す場面がありました。音楽も、ファシリテーターの言葉も、何一つ覚えていませんが、ある時、内から何か湧きあがり、胸元からふわりと両腕が上に伸びていき、自分がまるごと大空に受けとられた気がしました。ああ、今、ここにいていいんだ！という、むせかえるような歓喜があふれたその瞬間、もう一度この世界を信じてみようと思ったのです。

今ここで書いた、中央駅の保健所のグループの女性と私自身のエピソードは、世界の片隅で起きた、小さな「一人称」の出来事です。そして、バイオダンスのみならず、近年「ソマティック」と呼ばれる分野は、この一人称の体験を重要なものとしてとらえる視座に立ちます。西洋近代科学においては、人間が外界の事物や現象を客観的にとらえ、分析し、エビデンスにより論理的に説明する能力ばかりが重要視され、生命や私たち自身の身心もまた、その対象とされてきました。そうした文脈からはどうにもこぼれおちてしまう「内から感じる身体」を取り戻すことで、「心—身体—魂」全てを包み込む、人と

しての全体性を回復し、より根源的な健やかさに向かっているというのがソマティックの取り組みです。とりわけバイオダンスでは、グループの場で、全身でともに躍動する中からやってくる、曰く言い難く、なお、打ち消し難い鮮烈な体験を Vivencia (ヴィヴェンシア) と呼んで、人の潜在力の回復と開花の原動力としているのです。

## クラスでの風景

バイオダンスで行うエクササイズは、人の自然な欲求に触れる動きや、時代・地域・文化を超えた元型的な所作に根差しています。具体的には、例えば、リズムに乗って歩いたり、弾んだり、メロディーの流れにそって首や肩をゆったり溶きほぐしていくなど、およそシンプルな動きが中心です。ひとりで動くエクササイズもあれば、ペアやグループで行なうものもあります。ファシリテーターの簡単な説明とデモンストレーションによるガイドのもと、あるときは潑刺と、あるときは静かに、ただ純粋に、こんなふうに動いてみたいという身体の衝動にそっていきます。ガイドを参考にいったん動き始めたら、合っている／間違っている、上手い／下手はなく、言葉を超えた空間で、自分自身や他者と出会いなおす時、内側で何か燃え立ち、潤い、満たされて、調っていきます。論理的思考では整理しえない手応えをたよりに体験を重ねていく中で、これまでの生活や人生の中で発揮されなかった様々な可能性が目覚め、血肉化していきます。

シンプルかつ元型的といえば、歩く、というエクササイズはその最たるものかもしれません。同じ音楽とフロアを共有する人々が、それぞれ歩き出す。部屋の大きさは限られていますが、進む方向も、歩幅も、いつでも選ぶことができる。目に映るのは、向こうからやってくる誰かの表情や、前に行く誰かの背中。ひとりひとりが自分の道を歩く姿は思いのほか美しく、そこからまた自分の足元が照らし出されたりも。誰かと手を携えてともに歩き始めれば、一人で歩いているときとは明らかに違う何か湧きあがる。そこには別れも、また、新たな出会いもやってくる。「自分を大切にすること」「他者を尊重すること」とかということが、概念としてではなく、



助産院でのワークショップ

ダンスの中でリアルに生きられるとき、そこにあるのは、外からやってくる「～すべき」的な道徳ではなく、「～したほうが心地よい」という、内からにじみ出る実感であり、実感があるからこそその血肉化なのです。

### むすびに

最後に、トーロが生きた時代のチリの影と光を如実に描き出した映画をご紹介します。

ラテンアメリカを代表するドキュメンタリー映画の巨匠パトリシオ・グスマン監督の「真珠のボタン」と「光のノスタルジア」は、ピノチェト独裁政権下の凄まじい弾圧と暴力を具体的な記録をもとに振り返るとともに、遙か歴史を遡り先住民への蛮行により進められた植民地化と重ね合わせます。血塗られた歴史が語られる一方で、全編に渡ってチリの大自然が圧倒的なスケールとともに映し出されます。長い海岸線、青々としたフィヨルド、脈々と連なる緑、広大な砂漠。絶望的な状況の中でもなお、人々が守り、大切にしていた何かを、大自然の存在と、悠久の時の流れと、希望の光で包むようにして描きだすその目線は、絶望と希望のはざまにビオダンサを見出したトーロのまなざしと重なります。

この二部作の日本語版公式サイトによると、グスマン監督はピノチェトの軍事クーデターが起きた1973年、2週間監禁された後、同年の内にチリを出国し、キューバ、スペイン、フランスに移住しながら様々なドキュメンタリー作品を世に送り出し続けてきたとのこと。トーロがチリを去ったのは翌1974年。トーロもまた、アルゼンチン、ブラジル、イタリアへと本拠を移し、ビオダンサの活動を続け



東海大学マルチ・カルチャーキャンプでのワークショップ

ていきました。

トーロが当時、後に残してきた祖国や人々に向けた思いや心情は想像を絶しますが、1998年にはチリへの帰国を果たします。その後もトーロは世界中を渡り歩き、晩年病の床につくまで現場に立ち続け、2010年2月にサンチャゴに眠りました。

トーロは、ビオダンサを「人と人との出会いの詩」と表現していました。コロナ禍で分断はいよいよ表面化し、また、社会の様々な場面で益々ヴァーチャルが進む今日ではありますが、だからこそ、生身の身体で響きあうことがもたらしてくれる何かを、みなさんとあらためて手にとっていけたらと願ってやみません。

★日本のビオダンサの活動に関するサイト

<https://www.biodanza.jp/>

★ネット・ラジオ配信

Stand FM チャンネル名：「いのちのダンス放送局」

<https://stand.fm/channels/621a4bf062fdf0d800d75458>

（「踊る」と「生きる」のつながりについて、私の個人的体験を交えてざっくばらんにお話しています。）

★「ソマティック」についてのサイト

<https://www.somaticworld.org/>

# メキシコ軍に暴行された先住民女性の正義と癒し

アンヘル・マリスカル/エレナ・セパダ/イサベル・マテオス

「私をレイプした兵士3人を収監しても、私にとっての正義ではない。私個人の歴史はもっと長い歴史の一部分でしかない。長い間、彼らは人々に多くの暴力を振るってきた。私にとっての正義とは、娘たちがゲレロ山岳部を自由に歩けること、軍が村に入る時は当局の許可を得ること、私たちの作物を燃やさないことである」。

20年後、イネス・フェルナンデス・オルテガは、ハチドリのように胸がときめいている。彼女はゲレロ州アユトラ行政区の共同体女性センターの椅子で穏やかに微笑む。町には山岳部の先住民の子どものための寄宿舎がある。両施設は補償協定の一環で作られた。2002年3月、イネスは軍兵士に暴行された。バランカ・テコアニ村や反乱活動の参加者とみなされた人々にメッセージを送る社会的抑圧の武器として、イネスの身体が使われた。

彼女は挫けることなく、自らと先住民メパ〔トラパネカ〕のための正義を勝ち取った。暴行による悲しみと恐怖で彼女が病気になったように、先住民にとって、誰かが病気になれば共同体全体が病気になる。共同体が癒されれば、人々も癒やされる。彼女は正義の行為として癒しを求め続け、正義はやっと彼女の村に届き、徐々に展開している。

## グワ・クマ、知識の館

ゲレロ州アユトラ行政区役場町には、共同体センター・グワ・クマ（知識の館）がある。先住民の子どもや若者に、住居や食事、勉学の支援が提供され、寄宿する子どもと同じ村の女性たちが運営する。彼女たちは無報酬のボランティアで、子どもは尊厳と安心できる環境で成長する権利があると確信している。午後には磨かれた床の寄宿舎には掃除された机が並び、ノートやチョーク、音楽が聞こえてくる。寄宿舎の隣には先住民メパとタウン・サヴィ〔ミステコ〕の共同体女性センターがある。そこでは心理学者・弁護士・通訳を兼ねた一人の女性が暴力を受けた女性のケアを行っている。2021年9月開設の両施設では、人々が内省や社会構造の再建にむけたワークショップに参加している。行政区の住民7万人強の約6割は、貧困、疎外、不平等に苦見続けた先住民である。

アユトラは、2018年以降、腐敗した政党体制を



グワ・クマの宿泊施設

追放し、先住民の規範体制に基づき選出された共同体政府が統治することで知られる。同じように重要なのが、軍や州警察に代わって共同

体警察が担っている治安である。住民から選ばれた隊員が、地域で暗躍する組織犯罪集団の暴力を抑止している。昔からそうだったわけではない。

## メッセージ

ゲレロ州、州山岳部、そしてアユトラには、独自の闘争と組織の歴史がある。鬱蒼とした植生に覆われ、雨季ごとに寸断される湾曲した道沿いに先住民言語を話す人々が暮らしている。このアユトラでは、社会経済的な不公平、地域ボスの搾取、政府の専制政治にさらされてきた。国家は、搾取され貧困に苦しんでいる人々が組織した復権を目指す山岳部の社会運動に対して、他地域と同じように軍を動員した武力弾圧で対応してきた。

2002年3月22日、イネスは娘たちと家にいた。彼女と夫、父方の家族はメパ先住民組織（OPIM）に属していた。軍隊が家に来た時、彼女は中庭で肉を干していた。電気も冷蔵庫もない地域では干肉は肉の保存法である。「その時点で、ドニャ・イネスはゲリラへの食物提供者、ゲリラの一員、ゲリラ支援者とみなされた。村に肉があるなど知らない兵士は、彼女がゲリラのために肉を干しているとみなした」と、山岳部人権センター・トラチノリャン〔以下トラチノリャン〕のケツァリ・ビジャヌエバは指摘する。イネスへの付き添い活動でトラチノリャンが作成した記録では、軍はイネスがゲリラを支援していると非難し、イネスと家族、共同体に懲罰のメッセージを送ろうとしたとされる。そのメッセージがまさに彼女への性的虐待だった。

## 恐怖を植え付けるレイプ

「事件はゲレロ州に軍隊が駐留する状況で起きた。イネス・フェルナンデス・オルテガはバランカ・テコアニ村に住む先住民メパの女性で、当時25歳になる直前で、プリシリアノ・シエラと結婚

し、娘3人と息子1人がいた。2002年3月22日、イネスが4人の子どもと家にいた時、制服姿の兵士11名が銃をもって侵入した。一人が彼女を両手で掴み、銃を突きつけ、『地面に伏せろ』と言った。地面に横たわると、別の兵士が片手で彼女の手を掴み、ほかの2人が見ている前でイネスをレイプした。責任者を調査・処罰するため、裁判請求を提出したが、どれも受理されなかった」と、米州人権裁判所 (CoIDH) の報告書に記載されている。メキシコ政府が彼女に関する正義の執行を拒否したため、CoIDH に提訴することになった。

警察や軍という国家の代理者が社会的・政治的暴力として行使する女性への性的暴力は、偶発・自然発生的でなく、戦略的な暴力である。弾圧という文脈において政府の治安要員が加害者となった例は、イネスの事例以外にもある。

表：兵士・警官による女性レイプ事案

	州	行政区	先住民	被害
1994/6/4	チアパス	アルタミラノ	ツェルタル	3
1997/12/3	ゲレロ	アトリクスタック: ソピロペック	メパ	2
1997	オアハカ	ロシチャ	サポテカ	12
1999/4/21	ゲレロ	トラコアチイシュトラ ワカ:ヌエボ・サンホセ	アムスゴ	2
2002/2/16	ゲレロ	アカテペック: バランカ・ベフコ	メパ	1
2006/5/3・4	メキシコ	テスココ/サンサルバ ドル・アテンコ	メキシコ 外国人	19 4
2006/7/11	コアウィラ	カスタニョス		13
2007/2/26	ベラクルス	ソングリカ	ナワトル	1

この種の犯罪行為の報告記録はきわめて少ない。上記の事例は、暴行された女性が裁判に訴えたり、イネスのように国の司法制度が機能しなかった場合に国際司法機関に提訴を決めたりした数少ない例である。未報告のレイプは何十件もある。深刻な人権侵害の被害者への心理学・社会的同伴の専門家、アルナ (Aluna) 代表クレメンシア・コレアは、「拷問の一形態としてのレイプは政治的抑圧を実践する方式」で、その被害は家族や組織、社会全体に及ぶと主張する。

メキシコやラテンアメリカで被害者に付き添ってきた彼女によれば、このやり方は反対派の政治的・社会的活動を統制・処罰し、恐怖を植え付けることで、集団と連帯の構造を破壊しようとするものである。先住民文化では暴行のトラウマは個人や集団レベルで経験されると、コレアは CoIDH 聴聞会で説明している。「イネスの傷は、

家族の傷であり、必然的に組織の傷である。私たちはこの三つの傷を切り離すことはできない」。

### 思いどおりにさせるな

1998年6月7日早朝、アユトラのエル・チャルコ村に来た軍は地元の小中学校を包囲した。小中学校では共同体の生産計画について議論する集会があり、数人の先住民が寝ていた。軍服の兵士は数時間も銃や手榴弾で攻撃を続け、先住民をゲリラと非難し、11人を殺害、教師や未成年を含む30人以上を拘束した。事件は「エル・チャルコ大虐殺」と呼ばれ、それ以降、地域の軍事化が進行した。

イネスへの暴行の1カ月前、州内での弾圧と軍事化が進むなか、バランカ・ベフコでは、女兒一人を抱いていた先住民メパのバレンティナ・ロセンド・カントウ (17歳) が兵士に呼び止められ、「覆面姿の連中 (ゲリラ兵士)」の識別を強要された。彼女が拒否すると、兵士たちはレイプした。

弾圧がイネスの家にも及んだ時、彼女はメッセージを理解したのである。「正義を実現するため、グアチョス (軍人) が免責されないため、私の娘や地域の少女が私と同じ経験をしないため、地域の全女性が恐れずに山を歩けるため、彼らを告発したい」。イネスは、メキシコ政府に事件の責任を認めさせる活動仲間の一人アイダ・エルナンデスにこのように語った。こうして事件から10年に及ぶ修復にむけた交渉が始まった。

最初に訴え出たのは、事件の2日後、アユトラの検察事務所だった。告発相手が軍関係者なので権限がないと言われ、イネスと夫フォルトゥナトは州都 [チルパンシンゴ] で訴訟を始めることになった。差別的な扱いを受け、通訳もなく、婦人科検査を受けたが、後に当局は検査報告書を失くしたという始末だった。2年後、連邦検察庁は、捜査権限がないので軍検察庁に事件を委ねると裁定した。共同体の弾圧戦略を指揮した機関に事件関係者の起訴を依頼することになった。やがてイネスと家族、共同体、彼女の組織 [OPIM] は軍の嫌がらせや脅迫を受けだした。



アイダ・エルナンデスとイネスの家族

イネスと支援仲間は、事件を米州人権委員会に付託し、正義を求める長い道を歩み始めることになった。

## 家族

2022年9月15日、女性センターで会議・ワークショップが開催され、村々の少女や少年、男女、バランカ・テコアニ村の当局者が参加した。夫フォルトゥナト、娘のノエミ、アナ・ルス、ネリダ、息子のコロシオも出席した。週末の会合で、マチスモに基づく暴力についてみんなで話し合った。男性たちも、子どもの頃から、何に傷つき、どんな暴力を経験し、生き、学んできたか、どんな暴力を二度と見たくないかについて、紙に書き連ねた。

フォルトゥナトは静かで控えめだが、基軸であることは間違いない。夫が性的虐待を受けた妻の同伴者や支援者とならない事例と異なり、彼は加害の初日から妻とともに歩むと決意した。「お前に付き添うから、必要なものがあれば言ってくれ。私を頼ってくれ。どこでもお前を支える」と、20年前に言われたことをイネスは覚えている。

決断は容易なものではなかった。イネスの正義の要求を軍事的圧力で封じ込めようとした時期は、共同体も立場を明らかにする必要があった。彼女を支持すれば、弾圧は激化することになる。軍人のレイプと責任者の捜査と処罰を国が行わなかったことを訴えた CoIDH に提出された文書では、軍による報復の可能性についても記述されている。

2004年に米州人権裁判所がこの事件を取り上げ、それから2021年4月まで、様々な国際組織は、イネスと家族、共同体、組織、法的問題で彼女を支援する人々に対する特に軍からの絶え間ない攻撃と脅迫に対する懸念をメキシコ政府に少なくとも20回以上は表明した。CoIDHは、イネスと関係者の「生命と人格に対する絶えざる直接的な嫌がらせや脅迫」からの保護を何度も要求してきた。脅迫で何人もが殺され、投獄され、夫婦の子どもたちも村を去り、身を隠し不安な日々を過ごした。

「見捨てられたと何度も思った。両親は裁判で何日も家を空け、母は時々とても悲しげに疲れ切って帰ってきた。脅迫で一時的に村を出ることもあった」と、今は大人のアナ・ルスは述懐する。

十分な経済力がないイネスとフォルトゥナトは、脅迫から娘たちを救うため、幼い娘たちをアユトラの町へ送り出した。この小さな町で食い扶持を得るには、昔も今もお手伝いとして働くことしかなかった。幼い娘たちはメキシコの不平等が激しい地域の特徴である搾取と人種差別を経験することになった。「お金持ちの家に住み込んだが、実際には、宿題もできず学校にも行かせてもらえず、



暴力に関する思いの記述



男性の暴力について話し合い

家の掃除ばかりやらされた」と、ノエミは語る。これは何も特別なことではなく、先住民が多く住むゲレロ州では、メスティソが食料と引き換えに先住民の子どもや若者を使役する搾取体制が残っている。親は子どもを都市に送り勉強させるが、子どもたちは搾取体制に組み込まれてしまう。

ノエミは母に付き添って裁判に参加し、女性であること、スペイン語を話せないこと、先住民への人種差別など、母が法廷で受けた差別を目の当たりにした。この状況は特別なことではなく、正義を求める先住民にとっては当たり前だった。

米州人権委員会、CoIDH と裁判が進むにつれ、弾圧も激しくなった。イネスの兄ロレンソは2008年2月に暗殺され、OPIMの指導者も投獄・脅迫された[2008年4月5名拘束]。軍に直接尾行されたアナ・ルスは遠くに避難した。

バランカ・テコカニ村も軍から嫌がらせを受けだし、「恐怖で麻痺した」女性たちは、イネスと同じ運命を辿ることを恐れ、集会参加をやめ、外出を避けるようになった。人類学者アイダ・エルナンデスが CoIDH の公聴会用に作成した人類学的鑑定によると、正義の要求を支持し続けた人はごくわずかだった。トラチノリャンと国際正義権利センターの弁護士は、イネスの代理人として、レイプを行った兵士の収監、イネスや他の女性が二度と被害を受けないことの保障を含む包括的で回復的な正義を求めて、CoIDH に提訴した。

## 地域社会全体の判決

2009年、告発された事実のうち司法行政の省略と遅延に関して、政府は部分的に認めたが、軍による性的拷問、家族や共同体への影響、先住民メパへの制度的暴力は認めなかった。2010年8月

30日、CoIDHはイネスとバレンティナ・ロセンドに関する判決を下し、彼女たちは著しい貧困と差別のなかで、軍による制度的



イネスとバレンティナ



暴力である兵士からのレイプ・拷問を受けた証拠があるとした。CoIDH は、兵士を軍事法廷ではなく一般法廷で訴追すること、事実を正式に認めること、先住民女性の司法アクセスを保証する公的政策の実施、共同体が被った損害の賠償、被害者の子どもの教育支援、医療・心理ケア、暴行後や訴訟中に家族が生計を失ったことを踏まえた金銭的補償など、16 項目の措置を命じた。

アイダ・エルナンデスは、これは国際訴訟における先例となる大きな成果であると評価する。イネスに生じた損害が、村、地域の共同体、特に女性まで及ぶことを証明できたからだ。イネスが強調したように、正義と賠償は共同体まで及ぶべきである。「損害はすべての人に及んだので、賠償も同じでなければならない」と、彼女は説明した。

### 賠償への長い道のり

司法判決が出ることと傷跡の修復に取り掛かることは別問題である。アユトラ中央広場でメキシコ政府がイネスに公式に謝罪したのは、CoIDH 判決から約 2 年後、レイプ事件の 10 年後だった。2012 年 3 月、謝罪集会の出席者の前で、内務省官僚、国防省人権局長、州知事などに向かって、イネスはメパ語で発言した。「謝罪は受け入れたいが、皆さんを信用できない。町は準軍事組織に今も支配され、あなた方の隣にいる町長が組織犯罪に関わっていることは皆知っている」。

町長はその後離任したが〔任期 2008-12 年〕、アユトラが先住民の規範体系に基づき当局を任命できたのは 2018 年である。地域の安全を担う共同体警察の組織も進まなかった〔複数の共同体警察が乱立〕。寄宿舎と女性センターの運営は 2021 年に始まったが、継続に必要な財源はまだ確立していない。

家族レベルでは子どもたちの奨学金給付があった。ノエミは法律を学び通訳になることにした。「母が経験したこと、母にふさわしい配慮がなされず通訳もなかったことに対する怒りがあったので、女性の擁護者になりたい」と、彼女は言う。「一連の苦労はとて忘れられないが、その甲斐があったと言うことができる」。

アナ・ルスは、捜査官になり誰も不当起訴されないように犯罪学を学ぼうと考えていたが、心理学の学位を取得し、アユトラに戻って共同体女性センターへ参加している。「私たちは苦労し、見捨てられたと思ったこともある。今は遠くまで行かせてくれたことがわかる。母を誇りに思う」。



チアパスでの会議のイネスと通訳ノエミ

ネリダは教職課程の修了を望んでいるが、今はグワ・クマの責任者として、毎週、寄宿舎の子どもや若者の食

事を賄い、全員に食料が渡るようしている。

コロシオは、母親が不当な扱いを受けてから数年後に生まれた十代の少年である。彼のまわりでは、毎日、「権利」という言葉が飛びかい、政治的に活発な女性を何十人も見てきている。

妻イネスを「とても誇りに思う」という夫フォルトゥナトは、彼女の闘争心によって「今の私たちがいる。配偶者の彼女を一人にはできない。彼女の娘たち、共同体のために正義を実現することが重要だった。正義を目の当たりにできたのは素晴らしい。私の村やほかの村々の人々が同じような目に合わないためにも」と、メパ語で語る。

活動家で寄宿舎とセンターの管理者の一人ルシアは、「同じことを繰り返したくないので」参加したと言う。「以前は、どのように参加すればいいのか、どう自分を表現すればいいかわからなかった。だけど今はイネスと一緒に戦う術を知った。娘たちに望むのは、自分を表現し、恐怖心を持たないようになること。そんなことまっぴらよ」。

「イネスさん、20 年後のご自身をどう評価されますか？ どう語られ記憶されたいですか？」

「多くの女性や組織の支援は、もう無理と思った時にも力になった。インスピレーションを与える気丈な女性になりたかったが、望みはすべてかなった」と、ノエミの通訳で彼女は説明する。

アイダ・エルナンデス、イネスの正義の追及を支援した人々、トラチノリヤンのメンバーは、定期的にアユトラを訪問し、権利や社会構造の再建に関するワークショップを続けている。正義を求める道はまだ続くと分かっているからである。例えば、山岳部の軍事化・準軍事化は、依然として地域の脅威であり、レイプの実行者に対する判決は出ておらず〔一人は軍刑務所で不審死〕、女性センターと寄宿舎の運営資金は不十分なままで、つねに十全な財源の確保・運営が求められている。

出典：「Inés, mujer colibrí: justicia y sanación」, *Chiapas Paralelo*  
2022 年 11 月 30 日 翻訳

## ペルーの人口調査の歴史

村井 友子（アジア経済研究所）

### はじめに

今号から開始する連載では、2017年にペルーで実施された人口センサス（国勢調査）について報告していきます。筆者はアジア経済研究所（以下アジ研とする <https://www.ide.go.jp/Japanese/>）というアジア、中東、中南米、アフリカなど、開発途上国・地域の諸問題について研究する研究機関の図書館で働くライブラリアンです。

人口センサスは、一国に住むすべての人と世帯を対象とする最も重要な統計調査のひとつです。センサスをはじめとする政府公式統計は、社会科学分野の研究において必要不可欠な基礎的研究資料であり、アジ研図書館では、1960年の研究所創設当初から今日まで開発途上国の統計資料を網羅的に収集してきました。結果、現在約11万冊に上る国内最大級の統計資料コレクションを形成するにいたっています。また近年は、世界各国の統計局が統計データをウェブサイト上で公開する傾向にあり、なかでもラテンアメリカは統計情報のオープンデータ化を積極的に推進する地域になっています。ペルーも然りで、今回の連載ではセンサス実施機関の国立統計情報庁（Instituto Nacional de Estadística e Informática, 以下 INEI）がウェブサイト上で公開している2017年センサスの調査結果（<https://censo2017.inei.gob.pe/>）を主たる情報源にしています。

日本の国勢調査は5年に1回実施していますが、グローバル統計システムを統括する国連統計部は、世界の国々に少なくとも10年に1度、定期的を実施していくことを求めています。現在各国が実施している人口センサスは、2015年から2024年までに実施することが定められた2020年ラウンド人口センサスです。ペルーでは、第12回人口センサス・第7回住居センサス・第3回先住民族コミュニティ・センサス（Censos Nacionales 2017: XII de Población, VII de Vivienda y III de Comunidades Indígenas）が2017年10月22日から11月6日にかけて実施されました。連載では、このセンサスでどのような取り組みが行われたのか具体的に紹介し、集計結果から見えるペルー社会の姿を読者の皆さんにお伝えしていきます。

第1回では、まずペルーの長い人口調査の歴史を振り返っていききたいと思います。

### ペルーの人口調査実施の歴史

#### プレインカ・インカ帝国時代の人口調査とキープ

インカ帝国は、ペルー南部高原にあるクスコを中心に、15世紀から16世紀初めにかけて、アンデス一帯にケチュア族が打ち立てた大帝国です。インカは文字を持たない文明でしたが、王や役人は人民の統治と土地の分配に必要な情報をキープ（図1参照）と呼ばれる、太い横紐に、結び目や枝が連なった細い縦紐が何本もぶら下がり、結び目と枝の連なりで数を表現する道具を用いて記録していました。キープの作成と解読はキープカマヨックと呼ばれる役人が司り、人口、農産物、家畜、武器など資源についての統計情報を記録し、情報が記録されたキープはチャスキと呼ばれる飛脚たちによって中央政府に運ばれていました。



図1 キープ (CC-BY 3.0 by Sailko 2015年9月24日撮影)

ペルー国土で実施された最初の人口調査はさらにプレ・インカ時代の13世紀にまで遡り、クスコ王国の第2代国王インカ・シンチ・ロカが、来るべき戦争に備えて参戦可能な兵士や納税者の数を数えるために実施したと伝えられています（INEI 2018）。ほとんどのラテンアメリカの国々において人口調査の歴史がスペイン植民地時代を起点として始まるのに対し、ペルーはその歴史を遙かプレ・インカ文明の時代にまで遡ることができる稀有な国といえるでしょう。インカ帝国はピサロ率いるスペイン遠征軍により1532年に滅ぼされました。

## スペイン植民地時代の人口調査

1542年にペルー副王領が設立され、スペイン植民地政府による統治が始まりました。この時、行政の中心地は、山岳部のクスコから海岸部のリマに移されています。以降およそ280年にわたって植民地時代が続き、その間、植民地政府は人口センサスを第1回1548年、第2回1556年～1561年、第3回1570～1575年、第4回1745～1761年、第5回1745～1761年と計5回実施しています。INEIによると、第1回～3回、第5回の調査目的は、スペイン王室が征服した土地からできるだけ多くの利益を得るため、税金（貢物）を上納させる先住民の人数を把握すること、一方、第4回は宗教上の目的で、キリスト教化されていない先住民の数の把握が目的でした。

## 共和国政府の人口センサス

1810年から1824年まで続いた長い独立戦争の末、1824年に解放軍がスペイン軍に勝利し、ペルー共和国が創設されました。ペルー共和国は、これまで人口センサスを通算12回実施してきましたが、実施年は不定期で、第4回人口センサスの1876年の実施から1940年の第5回実施までに64年間にわたる長い空白の歴史も存在します。1959年に法令第13248号「センサス法」が公布され、1960年から人口・住居センサスを10年に一度実施し、経済、農業、工業、商業、サービス業のセンサスは5年に一度実施することが定められました。しかし、その後もセンサスの実施年には、ばらつきが見られます（INEI 2018）。

また、人口・住居センサスと並行して、先住民コミュニティ・センサスが、第1回1993年、第2回2007年、第3回2017年に実施されています。

ペルーの人口センサスは、センサス期間中の現在地主義による戸別訪問調査（センサス調査実施日に訪問する住居に実際にいる人を対象として調査員が聞き取り調査を実施する方式）により実施されてきました。しかし2005年人口センサスでは、このセンサスの実施方式を常住している場所の居住者をセンサス調査で把握する常住地主義（*de jure*）に変更し、フランスが2004年から開始した連続ローリング・センサスの手法と組み合わせて実施しています。その実施方法は、まず初年度の2005年にショートフォームによる全国的な人口センサスを実施し、次年度以降にロングフォームによるサンプル調査を順次実施していくというものです。

INEIは、当初ローリング期間を2006年から2013年までの8年間で設計し、2006年にこの計画を4年に短縮してサンプル調査を開始しました（藤田2006）。しかし、この方式は、サンプル調査の不備やローリング・センサスのローテーションが一巡し、ペルー全体の人口統計データの集計ができるようになるまでに、多大な時間、労力、費用を要することなどが指摘され、議論になりました。結局、INEIはこの連続ローリング・センサスを打ち切り、2007年に従来の現在地主義に戻して人口・住居センサスを実施しました。2017年の人口・住居センサスもこの現在地主義方式で実施されています。

表1 ペルー共和国のセンサス実施状況

実施年	調査内容		
1836年	第1回人口		
1850年	第2回人口		
1836年	第3回人口		
1876年	第4回人口		
1940年	第5回人口		
1961年	第6回人口	第1回住居	
1972年	第7回人口	第2回住居	
1981年	第8回人口	第3回住居	
1993年	第9回人口	第4回住居	第1回先住民コミュニティ
2005年	第10回人口	第5回住居	
2007年	第11回人口	第6回住居	第2回先住民コミュニティ
2017年	第12回人口	第7回住居	第3回先住民コミュニティ

ペルーの長い人口調査の歴史を振り返ると、センサス実施の目的が歴史的変遷のなかで変化しており、センサスの実施手法についても試行錯誤の跡が窺われます。次回からは2017年センサスの取り組みについて具体的に報告していきます。

## 参考文献

- 藤田峯三 (2007) 「ラテン・アメリカの2000年ラウンド人口・住宅センサス—現状と2010年ラウンド人口センサスに向けての展望—」日本統計研究所研究所報 36巻 67-92頁  
[https://www.hosei.ac.jp/toukei\\_data/shuppan/g\\_shoho\\_36\\_fujita2.pdf](https://www.hosei.ac.jp/toukei_data/shuppan/g_shoho_36_fujita2.pdf)
- Instituto Nacional de Estadística e Informática (2018), Censos Nacionales 2017: XII de Población, VII de Vivienda y III de Comunidades Indígenas, INEI  
[https://www.inei.gob.pe/media/MenuRecursivo/publicaciones\\_digitales/Est/Lib1437/libro.pdf](https://www.inei.gob.pe/media/MenuRecursivo/publicaciones_digitales/Est/Lib1437/libro.pdf)
- 村井友子 (2022) 「ペルー：2017年センサス（上）：2017年センサスと人口調査実施の歴史」（連載：途上国・新興国の2020年人口センサス、第8回）ライブリアンコラム 2022年10月  
<https://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Column/2022/1011.html>

ブエノスアイレスの街にも少し慣れてきたころ、ボリビアで知り合った先住民活動家から紹介を受けていた人に連絡を取りました。アルゼンチンに入って以来、ボリビアとの国境の町、宿泊したコルドバなど通過してきた町でも、ブエノスアイレスでも先住民の姿を見ることはあまりありません。ボリビアのように半数以上が土地の人というところとは大変なちがいです。電話に出たその人は E と名乗り、市庁舎に勤めているので、市庁舎のホールで会いましょうとのことです。市庁舎に勤めている、という言葉には少し意外な感じがその時はしたのです。ここまで出会った先住民系の人びとが、日本の感覚で言えば公務員という職に就いているということとはほとんどなかったからです。

見るからに温厚な感じの E さんはあまり多くを語らず、ただ「この情勢は難しいから、われわれは左翼でもない、反宗教でもない、ただわれわれは共同体と文化を復興したいのだ」というような表現で、外に対しては話をしている。「北から南まで先住民の問題は基本的に同じだと思う。ちょうど今彼らの共同体の中でテレビ局を作る計画があり、その件に関して大統領に自分たちの土地を侵害ないように請願書を出しているのだが、その返事が来ることになっている。明日はその件で集まりがある予定だから来たらどうか」と誘ってくれました。

「そうした集まりの時はバスク人たちが会館を貸してくれる、彼らはわれわれ先住民の活動に共感してそのような支援をしてくれているのだ」と言います。バスク人というのは意外な気がしましたが、1850年代から1940年にかけて、アルゼンチンはスペインから200万にのぼる移民を受け入れ、その多数がバスク人でした。ゲルニカが爆撃された当時アルゼンチンの大統領はフランコ支持であったので、故郷を追われたバスク人の受け入れを拒否したのですが、全国でバスク人を支援する組織が作られ、バスク系の人びとに寛容な政策がとられるようになったということです。そうした苦難を経た人たちがお互いに支えあうような関係を作っているのでしょうか。

当時アルゼンチンは軍事クーデター直後で、戒厳

令がしかれていました。国境からブエノスアイレスに到着するまで「不穏な空気を感じたり、警察の前に土嚢が積まれているのを目にしていたのに、うかつなことです。戒厳令の定めるところがどんなものか、気に留めていませんでした。会合は禁止されていたのでした。その場ではじめて会合の禁止を知り、彼らに迷惑がかかるようなことになったら困るので、簡単に自己紹介し、私たちを紹介してくれたボリビアの友の名を告げ、そこに出席してもいいのかどうか聞くと、あっさり大丈夫といわれ、話を聞くことになりました。

その日のテーマはテレビ番組に出るかどうかということで、こういう話はしばしばあることのようにです。誰が出るかということが焦点なものでしたが、この番組のあり方、先住民を取り上げる「白人」の側の意図はなにか、「白人支配の社会」は直接的な差別ではなく、この国は白い国と称して隠微な差別をしてくるなどが話し合われていました。激する言葉もなく、じつに冷静な分析をし、利用できるころはなにかと話し合っていました。激した言葉が出てきたのは、メンバーのひとりが話し合う中で先住民の歌を、言葉を、文化を恥ずかしく思うやつがいる、そういうやつは裏切り者だ、と、仲間の気持ちにいら立ちをぶつけたときのことでした。しかし、その時はそれ以上のことはなく、話は終わりました。

この日の後、Eさんから家へ招待されたのです。バスに乗って1時間余。私たちの宿のある地域に比べるとあまりにきれいで驚いたのですが、彼らの住んでいるところは、東京で言えば都営住宅風の団地でした。バスが止まると大勢の子どもがワラワラと走り寄ってきて、人見知りをしないその人懐っこさに挨拶の言葉をかけ、抱き上げたり。わたしのことは誰かのお母さんそっくりだと子どもたちは言いあっている。

家へ着くと、集まりの時にはあまり話さなかったEさんが次から次へと話が絶えません。話をはっきり理解できなかったのかもしれないのですが、彼の出身地のこと(と思う)を聞きました。

「グランチャコ地方の私たちの共同体はマタコといい、硬い木質の木の産地で、その木を扱う協同

組合を作ったことから共同体が生まれた。それはアルゼンチンではじめてのことだった。それを作る基となったのは、伝道のために派遣されたカトリックの尼僧の力が大きい。彼女はドイツ系アルゼンチン人だ。白人は何をするにしても最後までわれわれの仲間として残ることはなかったが、彼女だけは違った。彼女はわれわれを裏切らなかった。彼女はわれわれにちゃんとしたメソッドに則ってスペイン語を教え、一般科学、化学、物理、医学、経済学等々を教え、いままでたまされ続けてきたわれわれがこれ以上たまされないように教育してくれた。マタコの木は硬くて需要が多い。この木を商売にする白人のためにわれわれは働かされ、過酷な条件のもとで、ろくな給料ももらえず、栄養失調から子どもは死に、成人しても安らかに暮らすことはできなかった。彼女のおかげでわれわれはこの木を扱う協同組合を作ることができた。するとわれわれが簡単に搾取される相手ではなくなったから、やつらは種々の弾圧の手を加えてきた。組合のリーダーはみな逮捕され、この尼僧はいまリマにいるが、共産主義者だとして弾圧されている。

グランチャコでは人びとはレドゥクシオン―「教会の保護のもと」におかれているから用心しなければならぬ。相手にあれやこれやの口実を与えたり、付け入るスキを与えたりしないために、政党間の争い、右翼、左翼の殺し合いの輪に入らない、政党には関わらない、拒否する。そういう姿勢を貫いている。すると学生たちはわれわれを、わたしをブルジョア的だ、右翼だと非難し、あるいは共産主義者だという。この国の左翼は先住民の問題をたんに階級の問題としてしかとらえようとしない。それだけではすまない点を見ようともしない…

それだけではない、人種主義者たちの差別はいろいろな面に及ぶが、熱帯特有の病気の場合、われわれが罹って苦しんでも無視しているが、「文明人」に及ぶようになると研究を始める。例えばシャガス病だ。この虫が木材にくっついて都会にもあらわれるようになって、初めて治療が可能になった…

話しても話しても、話し足りないと言って、止まるところを知らない勢いなのですが、またの日を約束して帰りました。次の時は、妻の G さんに呼ばれて彼女を訪ねました。特別な用事があってというより、ちょっとお茶でも、というような感じです。彼女はとても喜んでいて、近所に洗濯店を開いてい

る日本人がはじめて彼女の自分を自分たちと似ていると、「エルマナ（姉妹の意、親しみをこめた呼び方）」と、呼び掛けてくれた。心が温かくなった。ほかの白人は、表面はいんぎんで悪意は見せないけれど、中身は冷たいから付き合う気はまるでしない、話をする気になれない。

白人は、彼ら自身はまったく気づかない無意識なのだろうが、自分たちを見下しているから、ひとつひとつの言葉、まなざしが心に突き刺さってくる。自分たちの文明に近づけてあげよう、白人をお手本にしてこのようにあれと無意識に求めてくる気持ちに傷つく。そうしたものに怒りが極度に強くなると、夫の E は喘息の発作に襲われる。ふだんから市庁舎のような官僚機構に入っているから緊張が強い。なにか問題が起きれば（おそらく白人と先住民との間の問題を言っているのだと思う）かれは矢面に立たされる。彼の健康が心配でたまらない。G さんはあまりに神経が痛めつけられるので、もう集まりにはそうしょっちゅうは行きたくない。目をひどく損ねるのも、そうした緊張があるせいかもしれない。

彼女が繕い物をするのを手伝いながら、ぼつりぼつりと語るのを聞いていました。アルゼンチンでは 1877 年「砂漠の征服作戦」によってパンパに住む 20 万人余の先住民が殺され、2 万人にまで減ってしまったと言われています。かつてはたくさん仲間がいて、同じ言葉、同じ文化のなかで暮らしていたものが、仲間を探さなければどこに住んでいるのか分からないほどの数となり、歓迎されない存在となってしまった、そんな現実にはどのように立ち向かえるのでしょうか。彼女が語る言葉のはしばしに、日々たえまない緊張を強いられる現実に対する憤りと心細さ、悲しみが感じられるのですが、自分は力にもなれないどころか、当の自分もまたどこまでその気持ちを分かちあうことができたのでしょうか。

日本に帰って出版活動をしていたとき、アイヌのチカップ・美恵子さんが「滅びゆくアイヌ」として自分の顔写真が使われたことに抗議し、「アイヌ肖像権裁判」を提訴し、そのいきさつを本にしました。

（『アイヌ肖像権裁判・全記録』現代企画室刊、1988 年）チカップさんと親しくなり、いろいろ話すのを聞いていたとき、チカップさんの悲しみと憤りは G さんが語ったことと同じなのだ、地域が違って問題の在りようは変わらないと思いました。

## ラテンアメリカにおけるフェミニズムをめぐる歌の旅(1)

正月2日にNHKの「100分de名著」の拡大版として「100分de フェミニズム」が放映された。女性への差別が今なお苛烈であるにもかかわらず、それを差別とさえ認識されていないことがまかり通っている日本社会において、一つの事件であったといえるだろう。同時に、今もフェミニストを表明すること自体が社会的バッシングを受けるリスクを伴う懲罰的社會であり、フェミサイド(女性憎悪殺人。スペイン語で *femicidio*) という概念が共有されないまま、女性であることが原因で命を落とす女性たちが、差別的文脈を脱色された「殺人」としてのみ扱われるという状況はまだ更新されるには時間がかかる状況である。

ラテンアメリカは悪名高きマチスモの地でありながら、現在こうしたフェミサイドや反家父長制に対する女性運動がバッシングされつつも大きな力を持ちつつあるように見える。こうした地域で音楽は、どのようにこの運動に寄り添っているかを数回に分けて紹介していければと思っている。知らない曲があったら YouTube など検索して聴いてみて欲しいと思う(ふだんはこういうことをあまり書かないのだが今回は敢えて強く書いてみます)。

私がラテンアメリカのフェミニズム運動がここまで顕在化し大きな力を持っていることに衝撃を受けたのは、恥ずかしながら2019年のチリの反新自由主義の大きな社会運動とそれに続くフェミニズム運動が現れた時だった。それまでも個別にはいろいろなトピックとして認識はしていても、全体の流れとして運動自体の盛り上がりとして認識できていなかったこともあり、先鋭化することでかえって分断をもたらすといった批判的言説もありながらも圧倒的な存在感を見せた彼らの活動に驚きを隠せなかった(そもそも彼女たちの「怒り」は正当なもので、彼女たちが抑圧的マジョリティにこれ以上配慮することを求めること自体が暴力ではないのか、というのが私自身の感覚に近い)。

2019年10月に始まるチリの動乱は、知る人はもうよく知っているトピックなので、そん



「レイブ魔はお前だ」パフォーマンス

りさ読者に今さら私が説明するのもなんですが、あえて簡単に説明すると、度重なる新自由主義政策の深化で貧困層の生

存と社会上昇の機会がどんどんと削られていく中、度重なる増税や社会保障の切り詰めや教育費の高騰、公共料金の値上げに爆発寸前になっていたところに、地下鉄料金の値上げがとどめを刺したことで、暴発的に広がった突発的な社会闘争だったと言える。

高校生たちが中心になって地下鉄料金を払わずに無賃乗車した運動が瞬く間に多くの人へと広がっていき、それをきっかけに市民の不満が爆発、地下鉄の駅占拠から一気に各地で暴動やデモへとつながり、地下鉄の多数の駅が破壊、炎上、百万人を超える民衆が首都でデモを行い大統領の退陣とピノチェト軍事政権時に制定された新自由主義的憲法の改憲を要求した。この突発的な民衆の統率されない蜂起に対してチリの警察はかなり暴力的弾圧を加え、警察による多くの失明者や性暴力が大きな問題となった。

こうした中で登場したパフォーマンスが、路上を占拠して行われる「おまえの進む先にレイブ魔が *Un violador en tu camino*」(レイブ魔はおまえ *Un violador eres tu* とも) だった。このパフォーマンスはもともとチリのバルパライソのフェミニスト・アクティビスト集団



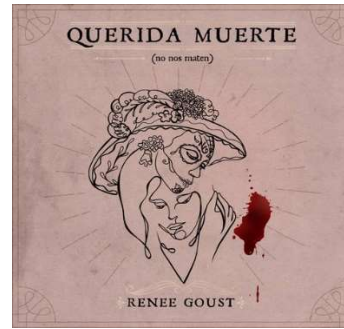
ラス・テシス

たものだったが、その家父長制と女性への暴力が可視化された告発的で分かりやすいスタイ

ルが人々の共感を呼び、チリ国内だけでなく、ラテンアメリカすら超えて、欧米や日本でもパフォーマンスが共有されていく大きなムーブメントに発展した(残念ながら日本では言語の壁もありあまり認知されなかった)。

そのパフォーマンスは、目隠しをしてリズムに合わせて軽く踊るように身体を動かしながら告発のスローガンに合わせて指さしたり、スクワットしたり叫ぶといったものだ。先鋭的な歌詞は「家父長制が私たちを裁く」「私たちに与えられる罰は、私たちが受けてきた暴力」「それはフェミサイド、加害者の免罪、強制失踪、レイプ」「レイプしたのはおまえだ」「それを行うのは警察、裁判官、国家、大統領だ」と、性暴力やフェミサイドが特定の「異常な」個人の行動によるものではなく、社会制度自体によって構造化された暴力であることを告発するものとなっている。

こうしたフェミサイドの問題は2015年ごろアルゼンチンで起きた「もうこれ以上はさせない運動」(Ni una menos)が一つの流れを生み出したとも言われている。海老原弘子さんによれば、2000年代初めからアルゼンチンではフェミサイドの実態調査が始まっており、女性であることが理由となっている殺人がアルゼンチンでは34時間に一人の勢いで殺されているということが明らかになっていった。2015年のフェミサイドがきっかけになってアルゼンチンで「ニ・ウナ・メノス運動」に何万人もの人が集まり一気に本格化すると、この運動は他のラテンアメリカ諸国やスペイン、イタリアなどにも広がり、スペインのフェミニズム運動と連動しながら女性であることが抑圧される社会の問題を顕在化させていった。ラス・テシスのパフォーマンスも明らかにこうした潮流の中から生まれており、ラテンアメリカの女性運動が、英語圏を中心とする#metoo運動以上にストリートを拠点とした下からの怒りとしてより強固な連帯と熱量を持っているように感じられる。さらに2020年にはメキシコ北部の歌手ビビール・キンターナがチリのモン・ラフェルテとともに歌い、反フェミサイドの闘いの象徴的な歌として各地の土地の文脈で歌い継がれている「恐れのない歌 Canción sin miedo」が注目された。ここではフェミサイドで殺された女性の具体的な名前や



Querida Muerte

地名を織り込みながら、女性が殺されること、性暴力に会うこと、そしてそれらの問題を過小評価する裁判所や警察、国家という制度自体を告発し、私たちは闘うと宣言する歌となっている。具体的な名前が入る、ということがもたらす意味をここでは大きく受け止める必要があるだろう。それにより、この歌は闘いの歌であり鎮魂の歌であり、継承の歌となる。それによってその土地の暴力と闘争の歴史の文脈で歌い直すことが可能になる。それもこの歌が各地で歌われている大きな要素であるように思われる。

また、フェミサイドを扱った歌で忘れられない曲としてはニューヨークで活動しているフェミニストでアナキストのメキシコ人歌手、レネ・ゴーストの「親愛なる死(私たちが殺さないで Querida Muerte (No nos maten))」(2019)がある。道をつけられる、常に値踏みされる。そして飲み物に何かをいれられる。母親からは「気をつけて」「夜道を歩かないように」と言われる。こうした女性たちが生きる日常は、あまりに男性の生きる世界と隔絶しており、男性たちには全く見えていない世界である。そして多くの男性は、自らが知らずに振るっている暴力と特権的位置にあまりに無自覚だ。女性たちが受ける暴力のほとんどが男性によるものであるにも関わらず、それは男性の問題としては決して認識されることがない。

導入に字数を割きすぎて、思っていた曲をほとんど紹介できなかったのも、次回以降で各国のフェミニズム運動に関わる個人的に私が衝撃を受けたり、



Canción sin miedo

しびれたりした名曲を紹介しながら、最後はペルーのフェミニズムにまつわる曲まで紹介できればと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

## 偶感：キューバ危機 60 周年

2022 年 10 月。私は若かった日々の追憶に耽っていた。全世界を核戦争の瀬戸際に陥れた 1962 年 10 月の「キューバ核ミサイル危機」から丸 60 年が過ぎたのだ。私は当時、大学 1 年生で新聞学科に籍を置いていた。「英字新聞講読」という科目があり、「ジャパン・タイムズ」を教材に英文外電記事を読みこなし、国際情勢を分析する訓練を重ねていた。遭遇した「キューバ危機」は、この講座が迎えた頂点であり、私のジャーナリズムの「原点」となった。

太平洋戦争下の東京に生まれ、空襲を避けて農村に疎開していた私が戻った東京は、地平の彼方まで瓦礫だらけの焼け野原だった。占領軍の主体・米軍の戦車が我が物顔で走り回り、キャタピラの跡を路上に繰り返して彫り込んでいた。街には「浮浪児」や娼婦が溢れていた。世をはかなんだ人々の首吊り死体や、隅田川を流れる土左衛門は日常の光景だった。

私が小学 1 年生になった年、朝鮮戦争が勃発した。これは既に形成されていた東西両陣営間の熱戦だったが、その戦火は、米ソ両核兵器保有国が厳しく対峙する冷戦の地殻から噴きだしたマグマだった。冷戦の中心は東西に分割されていたベルリンで、両陣営の影響圏拡大戦略の下、ベルリンから北半球各地に向けて「核の傘」が拡がりつつあった。

キューバ革命が世界史に登場したのは中学 3 年生だった 1959 年の元日で、その 3 年後の 10 月、キューバ危機が起きた。当時のソ連首相ニキータ・フルシチョフ (共産党第 1 書記) は、米国が優勢だった核国際配備の「均衡化」を狙って、前年 61 年 4 月に米 CIA 傭兵部隊に侵攻されたキューバへの核配備を構想した。無論、「革命キューバ防衛」を第一の理由にしていた。

当時のフィデル・カストロ首相 (革命軍最高司令官)、ラウル・カストロ第一副首相 (革命軍相)、エルネスト・チェ・ゲバラ工業相、オスバルド・ドルティコス大統領ら最高幹部は協議の末、米国各地を標的とする中距離核ミサイルや地対空ミサイルの配備を受け入れた。侵攻作戦に失敗し厳しく指弾されていたジョン・ケネディ米大統領は今度こそ米軍を本気で投入してくるから抑止力が不可欠だ、

とのフルシチョフの言い分を呑んだのだ。確かに世界最強の米軍が攻めてくれば、革命体制は一たまりもなかっただろう。

ソ連の大規模な核兵器類の海上輸送とキューバ島配備が始まる。だがそれが察知されずに遂行されることはなかった。空撮写真で事態が暴露されるや、危機が世界中を震撼させることになる。ケネディ政権指導部は軍部首脳陣や国連大使らを交えて秘密協議を続けた。2022 年 9~10 月、邦訳出版された『キューバ・ミサイル危機』(マーティン・シャーウィン著、上下 2 巻、白水社) には、連日の激論飛び交う白熱した協議の現場が再現されており、読む者に生々しい臨場感を醸し与える。

「異議なし」、「誰々に一任」、「全員発言してまとめる」。こんな没議論の談合的政策決定とは無縁だ。「議事録はとらない」、「議事録破棄」。こんな証拠隠しもない。米国の政党には「党議拘束」がなく、政権党議員は全面的に与党化することは稀で、政府批判を含め議論する。だから連邦議会は生きていく。各自が己の良心に従うため、付和雷同もない。この本を読んで、ケネディ政権がソ連政府を平和解決に引きずり込んだのは、民主的議論に立つ対ソ対話の勝利だった、と納得できる。

米ソ両軍は平和決着直前まで、核兵器使用も辞さない臨戦態勢にあった。ソ連潜水艦は核魚雷の発射寸前に踏み止まった。沖縄駐留米軍は核ミサイル「メース B」を中ソ両国に向けて発射する直前に誤りに気づいた。キューバ危機が「世界を核戦争の瀬戸際に陥れた」と形容される所以は、この本を読めば十分に頷ける。

キューバ危機の解決は、外交が軍事に勝る事実を証明した。昨今「核共有」を安易に口にする国会議員や元外交官が日本に目立つ。キューバ危機が外交決着したのは、広島・長崎の原爆地獄の教訓が米ソ指導部に生きていたからだ。この教訓は恒久維持せねばならない。

英字紙でキューバ危機の推移を追っていた新聞学科生は、遠い日の私の分身だ。思えば、あの「英字新聞講読」講座は、私の生業ジャーナリズムの具体的な出発点だった。



## エビのトマトソースがけ

CAMARONES ENTOMATADOS

読者のみなさん、お元気ですか。2023年最初のメキシコ料理は、エビをつかった料理です。エビは、メキシコではカマロン（camarón）ですが、ガンバ（gamba）とよぶ国もあります。メキシコではさまざまな魚やその他の魚介類でつくる、おいしい料理が無数にあります。メキシコには長い海岸線がありますが、今回とりあげるのはユカタン州の料理です。

スペイン人がアメリカ大陸にやってくるはるか昔から、ユカタン半島やチアパス州、それにグアテマラのマヤ人たちは、エビをつかった料理を口にしていました。スペイン人はアメリカ



大陸に多くの香辛料をもたらし、古代マヤ人たちも活用するようになります。このようにして、あらたな料理が生みだされたのです。

### ▽材料（4人分）

- ・ 中型のエビ 500g
- ・ トマト 中4個
- ・ 玉ねぎ 大1個
- ・ オリーブオイル 大さじ 4杯
- ・ オリーブの実 お好みの量（塩辛くなりすぎない程度の量）
- ・ レタス
- ・ 粉末クミン／白胡椒／粉末ニンニク
- ・ 塩 ・ 水 500 cc

### ▽作り方

- ① エビをゆで、殻とはらわたをとりのぞく。
- ② トマトを4つに切る。
- ③ レタスを小さく切る。

- ④ 玉ねぎの皮をむいて、4つに切る。
- ⑤ トマトと玉ねぎと水 500 ccをミキサーにいれ、塩をふって攪拌する。
- ⑥ 鍋に⑤を入れ、オリーブオイル（大さじ2）と、白胡椒、粉末クミンとニンニクを加えてから、ペースト状になるまで火にかける。
- ⑦ フライパンにオリーブオイル（大さじ2）をひいてエビを炒め、オリーブの実と粉末クミンとニンニク、白胡椒を加える。オリーブの塩気がたりなければが、好みで塩をふる。
- ⑧ 大皿にソースをいれて、周囲をレタスでかざり、エビとオリーブの実を盛る。
- ⑨ トルティーヤやフランスパン、白ごはんといっしょにどうぞ。

## (1) ペルーの強制不妊犠牲者への補償命命

2021 年 4 月にイネス・コンドリ・アナヤなど 6 名の女性が提訴していた損害賠償請求の訴えに関して、2022 年 3 月から審議していたリマ憲法裁判所第 5 法廷は、11 月 27 日に損害賠償を命じる判決を下した。この判決は、1996～2000 年にかけて、アルベルト・フジモリ政権が貧困対策として実施した「国家リプロダクティブ・ヘルスと家族計画」で 32 万人近くの女性が強制不妊手術を受けたことに関連している。この強制不妊手術はペルーの貧困層や先住民に対する暴力の最も非道な例の一つと考えられる。この判決で強制不妊手術を受けた女性たちが 4 半世紀近く求めてきた被害補償と謝罪の訴えはやっと認められた。

統合的な被害補償には、象徴的賠償、市民的権利の返還、経済的賠償、被害者と家族に対する教育的支援を含めた集団的賠償のためのプログラムの作成などが謳われている。ペルー強制不妊手術女性被害者協会 (AMPAEF) は判決を歓迎し法務省に履行を要求している。

しかし、強制不妊手術の補償を受けられるのは、強制不妊手術被害者登録簿 (Reviesfo) に登録された約 8 千人に限定され、被害者(女性 32 万人、男性 2.5 万人)の一部でしかない。登録方法が告知されなかったため、多くの人々は登録できなかった。ワンカベリカ県では約 2 千人が登録手続きを開始したが、登録できたのは 70 人で、アヤクチュ県も同じような状況だった。被害を証明する証拠・証人を提出できず、被害を受けたことを明らかにする恐怖から、登録しなかった人も多い。

強制不妊手術の責任者として告発されたフジモリ元大統領

や歴代厚生大臣の刑事罰を求め、現在もいくつかの手続きが進行中である。



判決後の AMPAEF のリマでの行動

出典：<https://www.servindi.org/actualidad-noticias/30/11/2022/ordenan-reparar-victimas-de-esterilizaciones-forzadas>

## (2) 民衆的エコロジーにむけた領域的フェミニスモ

表題は 2022 年 6 月初頭にアルゼンチン・メンドサ市で開催された農民運動、社会環境運動、フェミニスト運動にかかわってきたアルゼンチンとチリの女性たちの集会の成果報告集のタイトルである。集会の目的は、各組織が展開してきた水資源防衛、領域・食糧・エネルギー主権の構築に関する経験を語り合い、都市や農村でフェミニズムが構築している生活の再生産や代替的経済の構築に向けた闘争と結びつけることだった。アルゼンチンからは、全国農民先住民運動「われわれは大地」、われわれアメリカ民衆運動、大地の女性耕作者など、チリからは全国農村先住民女性連盟、ラテンアメリカ社会環境紛争監視センター、水と領域運動などの女性たちが参加していた。

10 月半ばに刊行されたこの小冊子は、共同体や想像力、そして何よりも未来について政治的な構築を集団的に行うための教材となっている。第 1 部では、集会に参加したフェミニストたちの基本的立場が整理され、第 2 部では、アグロ・エコロジーにおける女性の役割、食料安全保障に対抗する食料主権という理念、共有資産の水資源の防衛闘争、鉱山過剰開発や公害に対する闘いなどエネルギー主権について論じられている。

巻末には、殺害された環境活動家へのオマージュとして、マカレナ・バルデス (チリ、2016 年)、ベルタ・カセレス (ホンジュラス、2016 年)、マリエル・フランコ (ブラジル、2018 年) の似顔絵が付されている。集会参加の女性たちが自らの活動について語る 7 編の映像もある。



集会参加者の記念写真

出典：<https://rosalux-ba.org/2022/10/18/feminismos-territoriales-para-una-ecologia-popular/>

### (3) ティティカカ湖は密売業者の天国

ペルーとボリビアにまたがるティティカカ湖は、両国政府が密売業者の活動を統制できず、麻薬、燃料、水銀、野生動植物、農産物のだけでなく、人身売買も横行する違法経済の天国となっている。港町には物資運搬船の船着き場がトトラの茂みに隠れるようにある。

ペルーからボリビアに密輸されるものの代表はコカインやコカ・ペーストである。この違法物資は、臨検を回避するため木造船の船底に結わえたコンテナに詰められ運搬され、陸揚げ後はラパスなどの大都市に運ばれる。新型コロナ流行以降、流通量は増大したが、当局の摘発は頭打ちである。ペルーでの価格が安いジャガイモ、玉ねぎ、イチゴ、アボカドなどもボリビアに密輸されている。

ボリビアからペルーに運ばれるのは、補助金で安価なガソリン（2022年初、ボリビアの価格は1ガロン約3ドル、ペルーでは約14ドル）やディーゼルなどの燃料である。麻薬密売業者は資金洗浄の手段として、コカインを燃料に転換してとされる。もう一つは金精錬に不可欠な水銀である。ミナマタ協定に基づきペルー政府が水銀の輸入を制限したため、2016年以降、輸入はほぼゼロの状態だが、ボリビアがペルーの輸入量をカバーしている。ボリビア当局は2021年にペルーに密輸された水銀は約52トン（総輸入の27%）とするが、カナダの国際監視組織は10倍近くの量が密輸されたと推測している。密輸された水銀の多くはアマゾン地域にある違法金鉱山に送られ、これらの鉱山では、地元マフィアが調達したボリビアの女性たちが性労働者として働かされているという。



ティティカカ湖一帯の密輸ルート

出典：<https://es.insightcrime.org/noticias/lago-titicaca-paraiso-contrabandistas-peru-bolivia/>

### (4) LA 諸国で領域防衛に携わる先住民女性

Resumen Latinoamericano の2023年1月3日の記事は、ラテンアメリカの環境保護に関する著名な雑誌 Mongabay Latam の2022年度版に掲載された先住民女性の活動に関する記事でよく読まれた上位10位を公表している。

- ①ペルー・ウカヤリ県の森林違法伐採業者に連れ合いを殺害されたアルト・タマヤサワト共同体の先住民族アシェニンカの4名の女性の正義を求める活動
- ②コロンビア・アマソナス県のタラポト湖で、の地元先住民族ティクナ、コカマ、ヤグアの食料減となっている漁業資源乱獲を防ぐ活動を20年以上続ける先住民族コカマの女性
- ③ペルー・ロレト県で国営企業ペトロ・ペルー系の企業の石油掘削事業にともなう環境汚染を告発し続けているケチュア女性
- ④ペルー・パスコ県のヤネシャ共同体保護区の5つの共同体で、女性の指導者教育を通じて、地元にある有用植物の種子保全、育苗事業、草木染などの有効利用事業を展開
- ⑤エクアドル・アマゾン地域で開発にともなう事前協議の実施を求めて活動を続けているアマゾン女性コレクティブ（先住民族キチュワ、サパラやメスティソ）の女性指導者
- ⑥ベネズエラ東部のボリバル州とデルタ・アマルコ州にまたがる先住民族カリーニャの居留区イマタカ（7千Ha）で展開する共同体育苗施設などの森林育成事業トゥクプ
- ⑦コロンビア・アマソナス県の先住民居留区ミリティ・パラナの12共同体の女性たちが取り組む養蜂事業を格とした森林保護活動
- ⑧グアテマラ・イサバル県のエル・エストル行政区の二つの先住民族ケクチの共同体での地元産種子の保全に基づく家庭菜園活動
- ⑨コロンビア・プトマヨ県の先住民族ムルイ・ムナが森林伐採の跡地で行っているカナンガチャ椰子の再植林活動
- ⑩メキシコ・ソノラ州の先住民族コムカックのティブロン島海峡部に自生しているアマモの種子を使った伝統料理の復活再生に取り組む事業

紹介文表題をクリックすると元記事閲覧可能。

出典：<https://www.resumenlatinoamericano.org/2023/01/03/pueblos-origenarios-mujeres-indigenas-que-defendieron-los-territorios-de-latinoamerica-en-2022/>

湖の周辺に生息する絶滅危惧種の大型カエルも密猟され、食料・医薬原料・ペットとして国内外に出回っている。

## 編集後記

昨年12月半ばから、ペルーの抗議運動の映像を観ることがある。アヤクーチョの弾圧の犠牲者の追悼集会で、参加者が現大統領ディナ・ボルアルテを「くそつたれ、篡奪者」「人殺し」と非難しながら、「レタマの花」を合唱するシーンがあった。この歌を初めて聴いたのは1980年代末で、教え子からもらった歌手マリアナ・ポルタカレロのカセット・テープに収録されたものだった。このカセットには1986年に虐殺されたセンデロ支持者とされる詩人ホバルドに捧げる歌 Mamacha de las Mercedes が含まれ、彼女はセンデロ・ルミノソのシンパとみなされていた。

「レタマの花」は1969年のベラスコ軍事政権下で起きたシンチス（国家警察特殊部隊）によるワンタ虐殺を題材としたものである（**そんりさ** 165号で水口さんが紹介）。当時の政府によって禁止歌とされたこの二つを持ち歌としていたポルタカレロは、ペドロ・カスティージョ前大統領の選挙運動にも同行していたが、2022年4月に亡くなっている。

小林 致広

次回の「そんりさ」印刷作業は東京で、2023年4月15日（土）

発送作業は関西で、2023年4月22日（土）の予定です。

参加いただける方は、[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) まで連絡ください。

Vol. 182 「マヤ鉄道」建設は国家の安全保障問題？	Vol. 179 ニカラグア大統領選挙現地報告
Vol. 181 コロンビア大統領選挙 依然続く紛争の現場から	Vol. 178 エクアドル大統領選挙と未来の行方
Vol. 180 ハイチ共和国はどんな国？	Vol. 177 コロンビア 混乱の背景
	Vol. 176 オアハカ地峡部の自律的女性議会

## メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。メールアドレス、自己紹介メールを添え、[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

## 会員の種類

- ☆会 員：年 8,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆学生会員：年 5,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆賛助会員：年 10,000 円（一口） 総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆購読会員：年 4,000 円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

## レコム連絡先（住所が変わりました）

〒678-0001 兵庫県相生市山手2-502-1 大西方  
お問い合わせは、郵便、もしくはE-MAILで  
お願いします。

ホームページ：<http://www.jca.apc.org/recom>

E-mail：[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org)

Facebook：<https://www.facebook.com/recomsonrisa/>

郵便振替口座：00110-7-567396

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

レコム口座 114万2599円

グアテマラ基金口座 59万7419円

(2023年1月現在)

**そんりさ (SONRISA) 183号**

2023年1月22日発行

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

(RECOM) 定価 400円